ついじまつ

COMMUNICATION

ついじまつコミュニケーション：築地松情報誌1996　発行―ついじまつCOMMUNICATION編集部

創刊号

「ついじまつコミュニケーション」発行によせて

出雲平野の田園地帯に点在する築地松は四季折々に美しい景観を見せています。この地方を訪ねる旅人の心に強く印象づけ、また、ここに住む人たちの原風景として心なごますこの景観は、全国に誇れる貴重な財産です。

しかし、近年、築地松は松くい虫被害や生活様式の変化などにより著しく減少し、この地方の風物詩である景観も消滅の危機にあります。

平成6年5月に発足した築地松景観保全対策推進協議会では、築地松を守り、育てる取り組みとして築地松情報誌「ついじまつコミニュケーション」を発行することとしました。この冊子により、少しでも多くの方が築地松に対して関心をもたれ、美しい景観が後世に伝えられることを期待します。

築地松景観保全対策推進協議会

会長　斐川町助役　鶴島國夫

築地松 forever 物語

やさしく、懐かしい、日本のふるさとがここにあるから。

長い歴史と風土の中で生まれ、そして育まれてきた築地松（ついじまつ）。出雲平野（いずもへいや）に暮す人々の知恵の結晶です。この地方の※築地（堤（どて））に松が植えられるようになったのは、いつのころからか定かではありませんが、古代より“暴れ川”だった斐伊川（ひいかわ）の洪水に家屋が流されないため、また浸水を防ぐために築地が築かれ、その築地に、水に強い木を植えたのが始まりです。それがいつしか、日本海から吹きつける強い季節風（きせつふう）を防ぐために幹が太く根が付きやすい松となり、明治時代の終わりころから現在の生け垣のような形となり、今では出雲平野のシンボル的な存在になりました。しかし、1971年頃から「松くい虫」の被害が島根県にも及び、松はどんどん枯れ始めました。しかも時代の流れの中で住宅様式も変わり、築地松の※陰手刈り（剪定）をする職人も少なくなったことから維持管理が困難となり、年々減少する傾向にあります。そこで今、多くの人々にやすらぎと郷愁を呼び起こす築地松を生かし、守っていく運動が、築地松を持つ人々の間で始まっているのです。

※築地（ついじ）＝浸水を防ぐ土手　※陰手刈り（剪定）（のうてごり）＝築地松をきれいに刈り込む作業

暮らしの中で

――よせる築地松への思い――

佐野節郎さん(72)
出雲市中野町

"守りたい"それが家族の願い

築地松の存在を特に感じたのは、平成3年の台風19号が襲ってきたときだ。「あのときは随分助かりました。瓦が1枚か2枚飛んだだけでしたからね。でも、普段は樋につまる松葉の掃除が大変ですよ」

物ごころがつくころには、すでに現在の形だったという佐野さん宅の築地松は、青々と繁り空を仰いでいる。推定180年の歳月を経て、今日まで1本も枯れることなく、しっかりと根を張り家屋を風から守ってきた。「子どものころ、晴れた日には、よく松の木に登って斐伊川の土手の方やら周りの景色を眺めました。それは気持がよくてね」枝にカラスが巣を作ったり、ちゃっかり、幹にフウランが根を張ったり、築地松は家だけでなく鳥や植物の暮らしまで守っている。

佐野さんは、松くい虫の被害がこの辺りまで及んでからというもの、松の様子に心を配っている。「毎日、松葉の色を見ては"松くい"にやられていないかどうか確かめています。ですから、毎年の薬剤散布を欠かしません」

そして、もう一つの心配は陰手刈り職人の高齢化。将来、自分で技術を身につけるしかないのかと、次の世代は言う。家族みんなで築地松を守ろうとする空気が佐野一家には流れているようだ。

三島安夫さん(63)
斐川町大字原鹿

冬は暖かく、夏は涼しく。

「冬は風をよけて暖かく、夏は日差しを防いで涼しいですわ」

ちょうど、枝が揃えられたばかりの三島さん宅の築地松はすっきりと刈り込まれ、空に直線を引いたような縦横のラインが斐川平野の田園にみごとに調和し、堂々と背筋を伸ばして立っている。

近所に陰手刈りや薬剤散布をする人があることから、4年に1度の剪定は欠かさないで行なうことができる。「そりゃ、ちゃんと陰手刈りせんと、上がもたくなって大風が吹いたときにひっくり返ったりしたら大変ですけんね」

近年は草葺き屋根が瓦へ、雨戸がサッシに、そして風呂は電化やガス化されれば、薪も不要。暮らしの中で築地松の必要性は変化した。しかし、代々に渡って大切にしてきた松だ。普段の管理をしていれば、いざ大きな災害があったときに、しっかりと家屋を守ってもくれる。

陰手刈りの終えた松の木の下には、焼かれるのを待つ枝葉が山のように積み上げられている。「何とか陰手刈りの職人を育てるか、何かいい器械でもあればね」と、思案はつきない。4年後には、また陰手刈りの時期が訪れる。

築地松フォトコンテスト入賞作品

出雲平野の暮らしから生まれ、地域の誇りと愛着を育む築地松。そのフォトコンテストが開催され、369点の応募がありました。県内はもちろん、大阪や東京からの応募もあり、いずれも力作ばかりでした。写真に見る四季折々の築地松の表情をご覧下さい。

【選考結果】

■第1部「築地松のある風景」

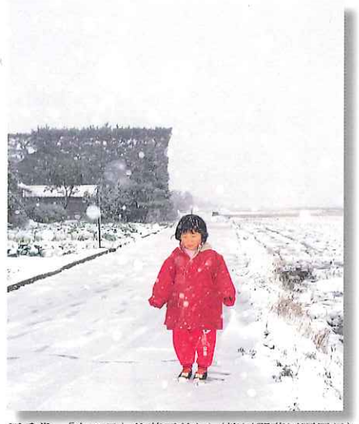
金賞 「雪の日」古賀典篤さん(兵庫県尼崎市武庫豊町)

銀賞 「春馨(しゅんけい)」河原治子さん(平田市平田町)

銅賞 「まつり」井上　豪さん(松江市法吉町)
「緑雄々しく」山下壮一さん(平田市小伊津町)
「秋」福田敏久さん(松江市浜乃木)
「雪景」増原吉郎さん(出雲市今市町)
「朝の一時」江角隆明さん(簸川郡斐川町神氷)

入賞 「斐川平野の夜明け」曳野英行さん(松江市黒田町)
「秋の里」佐藤秀夫さん(出雲市江田町)
「斐川朝景」高橋綟子さん(大原郡大東町大字大東)
「築地松と田んぼ」佐藤俊彦さん(松江市東津田町)
「雲」原　実生さん(平田市東福町)

■第2部「築地松と家族」



優秀賞 「冬の日」佐藤正美さん(簸川郡斐川町黒目)

優秀賞 「親子」山下壮一さん(平田市小伊津町)

優秀賞 「築地松守り」岡　正明さん
(簸川郡斐川町福富)

佳作 「刈込後の田植え」森山国子さん(簸川郡斐川町福富)
「農作業」佐藤秀夫さん(出雲市江田町)
「少年時代」田中和恵さん(松江市東朝日町)
「お宮参り」高田栄三さん(仁多郡横田町大字八川)
「築地松と農婦」岡　一夫さん(松江市西川津町)

ついじまつレスキュー隊

僕たちは、築地松を守る正義のみかた。みなさん、いっしょに築地松を守っていく方法を考えましょう!

5月下旬から6月は、予防薬剤散布の季節です。

マツノマダラカミキリをやっつけろ!

「松くい虫」の病原は、マツノザイセンチュウという長さ1ミリもない小さな生物で、それは、マツノマダラカミキリという昆虫が運んでいます。「松くい虫」によって枯らさないためには、元気な松に薬を散布する方法があります。薬のかかった松の枝を食べたマツノマダラカミキリたちを殺してしまうのです。

なぜ、5月下旬から6月上旬に?

夏の暑いころ、マツノマダラカミキリは、松の木に卵を産みます。それが大人になり松の木から飛び出すのが、5月下旬から約2週間なのです。その体には、マツノザイセンチュウが1万匹以上も入っていることが珍しくありません。だから、夏の産卵をするために松の枝を食べる5月下旬から6月上旬に薬を散布することが大切なのです。

薬を散布するときは、ここに注意。

元気な松の枝に、150〜200倍に薄めたスミパイン乳剤などをかけます。そのとき、木の下の方だけでなく、上の枝にもしっかりとかけることがポイントです。なぜなら、マツノマダラカミキリは、やわらかい新しい枝が好きだからです。また、薬は、種類や散布したときの天気によって多少ちがいますが、効目(ききめ)は約2週間〜20日です。ですから、1回目の散布から約2週間〜20日後にもう一度、散布しましょう。

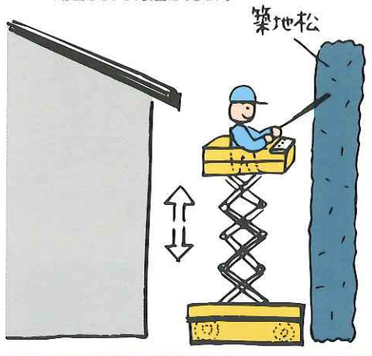
【注意事項】
①薬の濃度は、きちんと守りましょう。
②なるべく風のない天気の日に行ないましょう。
(早朝か夕方がよい)
③薬に直接、触れたり吸ったりしないようゴム手袋、マスクをつけましょう。
④畑や池、井戸がある場合、薬が落ちたり流れ込まないように、ビニールシートなどをかけましょう。
⑤おもちゃ、干した洗濯物、自動車など、薬がかからないように移動しましょう。

【防除についてのお問合せ】
出雲市　出雲市役所建築課景観係
TEL.0853(21)2211
平田市　平田市役所農林水産課
TEL.0853(63)3111
大社町　大社町森林組合
TEL.0853(53)5211
斐川町　斐川町役場農林課
TEL.0853(72)0211

ついじまつレスキュー隊のこげなもんがあーとエエわなへコーナー

築地松を守り育てるために、こんなモノがあったらいいのに、こんな制度があったらいいのにと思うことがありませんか?みなさんのアイデアをお寄せください。紙面でご紹介します。宛て先は下記まで。

【名称:ノウテゴリン】
隠手刈りをするための上下する箱型の器械。もちろん家と築地松の間に入る大きさで、移動も箱の中の操作で出来る。これなら、ハシゴの移動もないし、安全にできるゾ。



みなさんのお便り大募集

築地松について、今困っていること、知りたい情報、「こげなモンがええな〜」の応募、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。採用の方には、テレホンカードをプレゼントします。

＜宛て先＞ 〒690 松江市殿町1番地
島根県庁内景観自然課内
ついじまつコミュニケーション係
＜記載事項＞ 氏名・住所
(匿名希望の場合はペンネームを記入)
年齢・職業・感想・要望など

ついじまつ COMMUNICATION 築地松クイズ!

今回のテーマ「松を枯らす病気の犯人を探る」

Q:1 1970年のある日、松を枯らす犯人を発見。それは、ある虫だったのだ。さて、その名前は?
①ウシノザイセンチュウ
②ウメノザイセンチュウ
③マツノザイセンチュウ

Q:2 その虫には、足も羽もありません。さて、どうやってマツまで行くの?
①マツノマダラカミキリという虫の体の中に入る
②カラスのウンチの中に入る
③風にのって飛んでいく

Q:3 松を守るために薬をかけるのは、いつごろ?
①1月〜2月のはじめごろ
②5月〜6月のはじめごろ
③8月〜9月のはじめごろ

【ヒント】このページを読めば、わかるゾ!　さて、家族のなかで、いちばん知っていたのはだれかな? 答えは、7ページにあるよ。次号のクイズもお楽しみに。

築地松は
春には花々が咲き乱れ、
夏には緑のじゅうたんを青い風が渡り、
秋には黄色の稲穂が実り、
冬には白銀の雪が、
広がる平野を一面に染め上げます。
築地松はその景色の中で、
あるときは暮らしを助け、また心を潤し、
私達と共に生きてきました。
私達の、未来への贈り物は何でしょう。
それは、郷土の文化と美しい自然。
みんなで手をとり合い、考えましょう。
築地松を守る「魔法の杖」を探すために。

築地松景観保全対策推進協議会ってナニ?

築地松の美しい景観を、 未来へ伝えるための方法を考えて実行する会です。平成6年5月に設立され、島根県環境生活部長、島根県出雲総務事務所長、出雲市・平田市・斐川町・大社町の助役をはじめ、同市町の住民からの代表者各2名が入会し、築地松の調査や研究、普及などのための活動を行なっています。

築地松景観保全住民協定と助成制度のうれしい関係。

お隣や、近所で築地松のある家が5戸以上集まると、築地松を守るための協定を作ることが出来ます。そして、その協定が5年以上続けられることが約束されているとき、 協定にもとづいて行なわれる築地松の管理(松くい虫の防除、枯れた松の伐倒、築地松の剪定)にかかる費用を4年に1回、協議会がある程度負担してくれるのです。ただし、限度は10万円までで、全額の半分以内です。これが、助成制度なのです。

【ついじまつクイズのこたえ】　Q1=③　Q2=①　Q3=②

高橋啓三　漆彩画家　島根県大社町在住

「日仏現代美術展」連続入選入賞後、優秀賞、ソシエテ・ナショナル・ボザール賞1席、フランス環境庁自然保護芸術賞特別賞など多数受賞。築地松や自然をモチーフに、漆を原料とした独特な漆彩画を描く。

ついじまつCOMMUNICATION

風のたよりに

飛行機の窓から見下ろす出雲平野の景色は、いつもながら日本のふるさとを思い起こさせます。仕事の関係で月に1度は、この島根を訪れるのですが、自然派志向の僕には、とくに親しみと好奇心をそそられる土地です。今の時代は、何かと忙しいと思いませんか。僕の子どもの頃は、もっとゆったりと、やすらかに時が流れていたような気がするのです。島根には、現代人が失ってしまったその「やすらぎ」と「ゆるやかな時」を肌で感じます。家を風から守りながら暮らしに溶け込み、出雲平野の風景の一部になっている築地松もそのひとつではないでしょうか。この風景が、都会にはない日本のふるさとの情景として胸の奥深くに染み込んでくるのです。実は、僕が育った家の前にも風よけの木が植えてあります。築地松を見ると、普段は気付かない「木」という自然の力に助けられて暮らしていることを思い出します。

清水國明（しみずくにあき）
1950年、福井県生まれ。'76年京都産業大学法学部卒業。'73年芸能界デビュー。テレビ番組の司会、ラジオ、雑誌で活躍中。家族でログハウスづくり、アラスカキャンプ、トラック諸島無人島サバイバルキャンプなどに挑戦。自然暮らしの会代表。国際A級ロードレースライダー。オートキャンプ研究会顧問。バスフィッシングプロ。著書は『野ばなしのすすめ』『備えあれば楽しい』他。

つ い じ ま つ
COMMUNICATION
編　集　部

〒690 松江市西川津町3570ハーベストビル1F　TEL（0852）27-0009 FAX（0852）27-0248

表紙モデル：岡 ふぢ子さん（89）斐川町在住